

〈短歌〉

— 全体講評 —

今回は初めて皆様の応募作の選をさせていただきましたが、全体として読者の心に届く真摯なひびきがあり、一首一首、印象深く拝読いたしました。

短歌は、三十一音律の器に暮らしや心境などを盛る文芸ですが、その際、あの斎藤茂吉も述べているように、歌の調べがとても大切です。きつちり三十一音にまとめるだけではなく、字余り・字足らずも技巧のうちにあります。その歌の調べが一首に生命を吹き込むと言ってもよいでしょう。今回の選では、詠まれている内容とともに、歌のリズムにも着眼しました。

人とのつながりが限定化されるコロナ禍の現在、あらためて日々の生活や想いをうたう一首一首がかけがえのない光を帯びていると実感しました。

山田 吉郎

【最優秀賞】

かなしみは私だけではないのだと少し歪んだ満月の夜

石邊 綾子

— 講評 —

短歌表現に熟達した作者であろう。「歪んだ満月」という暗喩がうまく生かされている。

上の句から下の句への接続の仕方が、意外性もあり絶妙である。

【優秀賞】

忘れ得ぬふるさと昭和を携えて祭囃子のあとの晴曇

飛鳥 栄司

— 講評 —

昭和の時代へのノスタルジーを胸に抱いて現代を生きる感慨がしみじみと伝わる一首。「祭囃子のあとの晴曇」の表現に微妙な心の裏がのぞいている。

【優秀賞】

「はんぶんこ」言葉覚えて二歳児はみかん皮むき一人で食べる

小川 理恵

— 講評 —

「はんぶんこ」という幼い子の覚えてたの言葉が、一首のなかでも新鮮に感じられる。着眼がすばらしい。結句にもう一工夫があると申し分ないであろう。

【優秀賞】

読み返す文ありタンスの奥深く寂しい折の胸充たすべく

高橋 敦子

— 講評 —

タンスの奥深くにしまった文をそと取り出し読み返す情景が、何かドラマの一シーンのように浮かんでくる。寂しさの中のほのかなぬくもりが印象深い。

【優秀賞】

まだ言葉芽生えぬ吾子に陽は注ぎ未来のことは蓄えている

長谷部 誠一

— 講評 —

わが子へのあたたかく、生き生きとしたまなざしが感じられ、
読者の心をも元気にするような一首である。リフレインの手法、
快いリズムも効果的。

【優秀賞】

六人が立候補した委員会あるか不明の修学旅行

浜谷 マリヤム

— 講評 —

コロナ禍の社会を反映した作であろう。クラスで修学旅行の係を
決めているのであろうか。下の句の簡潔な表現が、若い人たちの心
情をよく伝えている。

《俳句》

— 全体講評 —

令和一年度は表彰式が新型コロナ禍の影響で開催できず、令和二年度もコロナ禍にございます。俳句は座の文芸ですから、気心の知れた俳人が集まって、句会の選句を通して評価を仕合い、文学的個性を研ぎます。が、新型コロナはこの集まることを許さないウイルスです。現在はネット句会で凌いでおります。今年度は六十六名の一般の方々に加えて、小学生の皆さんが一〇二名応募下さり、大変感動致しました。外出自粛により、身近な句材をどう新鮮に表現するか、苦心を重ねられた跡が滲んでおりました。特に小学生の皆さんの句は素直な実感が五七五に表現されており、俳句を愉しむ心が伝わって参りました。ご応募の皆様方の素敵な詩との出会いに喜びを新たに致しております。

梶原 美邦

【最優秀賞】

擦る手に春待つ声を吹きかけて

伊澤 利保

— 講評 —

手の平に寒さが張りついてくる。掌を合わせて擦り落とそうと向きになる。ふと微かな温み。思わず春への心の声を息として掌に強く吹きかけていた。

【優秀賞】

飛び立ちて光となりぬ初雀

河合 紘一

— 講評 —

群れをなして雀は温さに寄り添っていた。土と同じ色の衣装を纏っていたが、人間の視線を感じ、一斉に飛び立った。恐怖が光の粒となって空に広がった。

【優秀賞】

リハビリの文字に力や賀状来る

河村 美恵子

— 講評 —

日常に適應できなくなった身体の機能を治すべく、訓練を受けていると言う友。今年は来ないと思っていたが、回復を思わせる元気な文字の賀状が来た。

【優秀賞】

一つ聞き一つ忘れる残花かな

小糸 藍子

— 講評 —

忘れる事は人間の命を守る武器。齢を取ると「若き記憶」を抱き、昨日を忘れ今日に生きる。ふと散り残った花の過去を懐かしむ風情に似ていると思った。

【優秀賞】

マスク顔目のみで解る友来たる

佐藤 正一

— 講評 —

西洋の方がマスクを嫌うのは口の動きで相手の心を察する処にある。日本人は目付きで他人の心を読む。直ぐに友と判るマスクの目の友が遣つて来た。

【優秀賞】

目の合ひて枝付きの柿貰ひけり

中村 みき子

— 講評 —

この句も「目」が効いている。来年の豊作を祈る木守柿を残し、一枝を竹の竿先に挟んで折つた瞬間の視線が近所の私の目と合い、柿を戴く事になった。

【優秀賞】

大空へ息吹のひかり冬木の芽

林 宏子

— 講評 —

雑木林の中になると、芽吹く音が聞こえると言う。又山の芽吹く息が空を霞ませるとも言われる。芽吹く前の山の木の芽は力が艶めき、空に息吹を輝かす。

【優秀賞】

先頭は紫雲英のティアラ縄電車

堀場 美知子

— 講評 —

田圃に緑肥となる紫雲英（レンゲソウ）が咲いている。縄電車は畔道を通り、春の田畑で花摘みをしたらしく、先頭の子は王冠型の髪飾りをして遣つて来る。

【特別賞】

公園でだれを待つのかゆきだるま

海井 紗和子

— 講評 —

公園にゆくと、親子が話し合いながら雪達磨を作っていた。夕方通りかかると、雪達磨はどこかへ出かけそうなバケツを破り、誰かを待っているらしい。

【特別賞】

大そうじこの一年をふりかえる

田場 龍翔

— 講評 —

年末一家総出で、家の中から庭まで掃除。自分のもの、お母さんの物等、次々と目がゆく。これは旅行の時に買った物。楽しかったね、と一年を振り返る。

【特別賞】

帰り道ゆぐれ早く思った日

吉田 彩乃

— 講評 —

小学校に入るまでは友達と外で日の暮れるのを忘れて遊んだ。今は学校と塾とで忙しい。塾へゆく途中、過去との対比の中で、「暮早し」と、呟いていた。

【特別賞】

夜があけて新たな一年こんにちは

鈴木 悠太

— 講評 —

無観客の紅白歌合戦を観ながら、今年はコロナの話題ばかり。来年には自由に外出できるといいね、と床に就く。朝起きて新年にお願いね、と挨拶した。

《川柳》

— 全体講評 —

今年も「自由題」の募集でした。川柳の場合は自由題と言わず「雑詠」と表記します。題にとらわれず自由な着想で詠むのは楽しいが、独り善がりの句になり易いとも言えます。大会、句会など競吟で「自由題」が出ることはほとんど無く、ルールに従い同じ土俵で課題とどう向き合って詠むかで、評価されます。課題があつてこそその大会と言えらるでしょう。無題、自由題で句の優劣を決めることはほとんどありません。新型コロナウイルスの感染が収束されぬ現状を反映して、手洗、マスク、ワクチン等の句が多いのも頷けます。選外の作品もあと一步の、惜しい句がありました。日頃から多読、多作、多捨を念頭に字余り、字足らず、切れ字、助詞止めなど、再度見直して提出すると良いでしょう。

荻原 美和子

【最優秀賞】

自粛して脚力は減り身は肥える

— 講評 —

外出の自粛要請が続き、運動不足による体力の衰えや、体重の増減が気になる人が増えている。閉じ籠りが続く状況を具体的に詠んだ、コロナ禍の句。

竹岡 美恵

【優秀賞】

古希すぎて生きてるだけで丸儲け

— 講評 —

七十歳を過ぎたら、あとは生きていくだけで十分と思う作者。医学の進歩は目覚しく、無理をしないで穏やかに過ごす時間はまだ、たっぷりあると思う。

大宮 啓子

【優秀賞】

気の緩み引き締め乗らぬ口車

— 講評 —

優しい言葉や親切に考えもせず、つい乗ってしまい被害に遇う人が増えている。気持ち弾んでいる時はなおのこと。口車に乗らぬと言う自信家も要注意。

鈴木 昭子

【優秀賞】

マスクつけ手抜き化粧に家計浮き

— 講評 —

コロナの感染対策に日々のマスクが欠かせない。化粧をせずに出掛けるのは気楽で、家計に優しいのも有難いこと。忙しい女性の共感を呼ぶ句の句。

鈴木 澄子

【優秀賞】

怖いねとばあちゃんやたら手を洗う

二村 七重子

— 講評 —

感染予防には、こまめな手洗いが欠かせないと言われるが、何度も手を洗うおばあちゃんの日常を軽いタッチで纏めた。おばあちゃんの行動に共感する。

【優秀賞】

それぞれにマスク可愛い通学路

山ノ井 松枝

— 講評 —

小学生のマスクがなんとも可愛い。ママの手作りや、子供用のおしゃれなマスクもあり、友達とにぎやかに通う児童の平和な情景がストレートに伝わる。